

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別投承認雜誌)第三五二号
昭和四十七年一月二十五日印刷 昭和四十七年二月一日発行



1972

2

第三十八卷

第二号

目次

表紙「九品仏総門」松涛達文画

真の人間を育てる……………河原利藏……………(2)

沖繩の仏教事情……………藤井正雄……………(4)

私の恩師……………(9)

鶴飼光順・北林余志子・きりふち輝

聖典解説②一枚起請文講説……………井川定慶……………(14)



表紙の解説

東京世田谷 浄真寺(九品仏)

天然記念物の榎・杏葉など繁茂することから、浄真寺は、上中下各三品の九体のアミダ仏を奉安していることから、九品物の名称で世に知られている。この総門は元禄年間の建立。開山珂碩上人筆の「般若舟場」という額が掲げられているが、これより念仏の霊場であることを示したものとされている。また数えて三年目の八月十六日に行なわれている来迎会(おめんかぶり)は、二世珂碩上人によつて始められたが、無形文化財に指定されており、度毎に多くの参詣者を集めている。

ねはん会法話・灯火消ゆ……………山口諦存……………(16)

異僧「真覚」第二回……………柴田六五郎……………(19)

浄土宗史夜話①法然上人と母……………三田全信……………(22)

誕生寺紀行……………磯貝基教……………(26)

一億総中流化を考える……………(28)

「道」四天王寺への道……………高橋良和……………(30)

浄土宗列祖の墨蹟をたずねて……………(32)

語和声念



<お水取り>

暦の上では立春をつけているが、時折り肌寒さを感じる季節である。しかし、お水取りの行事がすむと、春はすぐそこまで足をしのばせて来ている感じがする。お水取りの行事は、奈良の大寺境内の二月堂において、毎年二月おこなわれる有名な行事である。二月堂は、東大寺を開いた良弁の弟子実忠が孝謙天皇の天平勝宝三年（七五一）に勅許をえて創立し、本尊には不空羂索観音をまつり、その落慶供養の法要が二月一日から十四日まで行われた。お水取りは、第十二日目の終夜の法要の中ごろすなわち十三日の午前三時ごろよりはじまる。呪師とよばれる法要導師の一人が先頭となり、僧侶を南北両座に分けて、北座の僧侶は、いずれも牛王杖という柳でつくった長い杖をつき、ほら貝、金剛鈴などをたずさえて行列をつくるのである。夜空にあかあかと燃える童子のもつ松明（たいまつ）にみちびかれ、二月堂を出て堂の下の方にある良弁杉のかたわらの祠に参詣してご祈願をおこない、祠のそばにある一般には若狭井といわれている関伽井屋（あかいや）に入ってその井戸から水を汲むのである。関伽井屋はお水取りの日以外は閉ざされているが、この日ばかりは開けられて、水が汲み出されて使者の手によって二月堂に運ばれる。このようにして、再び二月堂に帰って法要がつとめられるのである。

水取りやこまりの僧の杵の音 芭蕉

身を清浄にたもち、心の迷いを断じ、ダイナミックな法要儀式を通して若水を本尊前に供えて、鎮護国家、五穀豊稔を祈願する行事は、現代人の心もとらえて止まぬものがある。

現在の日本は、激しい変革のなかで、新しいものを追い求めているが、古式床しい伝統的な行事のなかにいまの日本人のたましいをゆさぶるものがある事を見失ってはいないだろうか。それは、失いつつある日本人の心のふるさとが仏教の儀礼のなかに残こされ伝えられているのである。

（宮林）



真の人間を育てる

—教育のむずかしさ—

河原利蔵

(長野県中野中学校長)

教育というものはむずかしいものである。お互に私たちは、自分の子供たちを、進歩的な思想に対して理解ある人間に育てたいと思う。しかし、進歩的な思想とは一体何であるうか。それはやや漠然としたものであり、いつの時代にも絶対に正しいという訳にはいかない。従って子供たちは、その親によって培われた進歩的思想の故に、世間から非難を受け、異端者と見られることも有りうる。その意味からいうと、教育というものはまことに危険なものである。子供たちのために最善と考えた親の教育方針が、かえって逆に、子供のための最大の不幸となることもありうる。

私たちは、どのような教育が子供にとって最善であるかという問題について、迷わざるを得ない。明治の末に生まれ、大正から昭和のはじめにかけて教育を受けてきた人たちは、

その時代の教育思想から深い影響をうけている。これはその人たちの生涯を貫く思想の根底を成しており、この影響から離脱することには非常な困難がある。实例をもつていうと、今日、七十歳以上の日本人は、最も進歩的な人、あるいは自由主義者と見られる人たちをも含めて、ほとんど全部が天皇中心主義的な感情をもっている。しかし現在三十歳前後の日本人のほとんどすべては、皇室中心主義などには見向きもしない。この差別はすなわち、かれらが育ってきた時代の教育の差である。

私は、いま各々二つのうち、どちらが正しいとか、どちらが間違っているかといおうとするのではない。ただ、教育というものがそれほど深く人々の精神の中に根をおろすものだということをいいたいのである。この事は同時に、教育の

任にあたる親や教師の責任の重さ、大きさということにもなる。つきつめていうならば、つぎの時代を背負ってくれる日本の若者たちが、どんな思想をもちどんな理想を持っていたほしいか、という問題である。

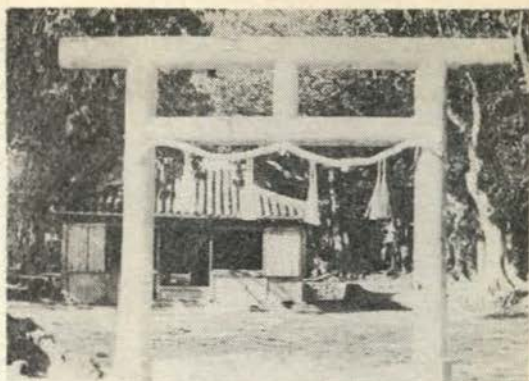
すなわち「教育の理想」ということである。

私たちは子供たちの教育について「教育の理想」を持ちたい。教育の根本方針を確立して行きたい。それは個々の親たちだけでなく、国家は国家として、教育の理想をもち、それを文部省の方針として打ち出して行くわけである。この場合、親たちの描く教育の理想と、文部省の描く教育の理想と、さらに教師たちの描く教育の理想とが、びったりと一致したならば、教育効果は非常にあがる筈である。ところが、現在では、文部省のかかげる教育の理想と、大部分の教師が考える教育の理想とが、はなはだしく喰いちがっている。親たちの教育についての考え方も四分五裂の有様で、その分裂はPTAの集会のなかでしばしば紛糾の種となっている。

かように教育界の混乱している現在から将来に向って、私たちは、子供たちにどんな方針を立てたらよいであろうか。私自身ははなはだ迷わざるをえない。なぜかというと、私たちの短い生涯のなかですらも、敗戦、国家権力の崩壊、天皇政治の廃止、民主政治の確立というような大変化がおこって

いる。この次にどんな変化がおこり、どんな政治思想が国家社会を支配するようになるのか、見当がつかないからである。

このように考えてくると、結局、私たちの教育の方針は、次に来るべき時代がどんな世界であろうと、その中で立派に生きて行けるような生き方をもって根本方針としなくてはならないと思う。それには二つの方針が考えられる。一つは流動的な生き方、つまり自分の方針をもたずに、時代の流れと共に流れる生き方であり、もう一つは、流れの中に立つ樗牛のように、毅然として、時代の流れにさからい、悲劇的ではあっても、自己を確立して生きる生き方である。独立独歩というか、一つの信念を貫いて行く生き方ともいうことができる。実際には、一方の生き方に徹するということはむしろ難しく、抵抗したり押し流されたりしながら生きて行かなくてはならないが、その中でも、私たちが信じてきた生き方、尊敬に価する生き方というものはある筈である。いつの時代でも、自尊心と自立心とをもち、高い知性と批判力とを養う事は大切なことである。そして真実を尊び、平和を愛し、人類を愛し、社会のために価値ある生活をいとなむことに努力する。そういう人間を育てる教育を考えたいと思う。それは、どうしても宗教とのかかり合いが重要なポイントとなる。



—石垣市の宮鳥御嶽—

第十二回「浄土文化講座」より

沖縄の仏教事情

藤井正雄

(大正大学助教授)

ます。

私は今回、九学連合（宗教学会、民族学会、社会学会等）の宗教班の一員として沖縄の共同調査に参加致しました。本日はその研究調査の一端を報告させて頂きます。

沖縄は、地理的条件としては日本本土よりも台湾に近いといふことから、本土とは極めて異なった宗教的環境があります。本日は、沖縄の仏教事情というお話を進めて行きます関係上、現在の寺院の状況からまず話してみたいと思

います。宗教法人と認められている寺は全部で二十一カ寺です。現在の沖縄は戦争中の宗教団体法の規制を受けておりまして、その意味で法人として認可されている寺が二十一カ寺、認可されていない寺が一カ寺、非法人が六カ寺、総計二十八カ寺の仏教寺院があります。しかもその内訳は、那覇を中心に沖縄本島の南部に殆んど集中し、八重山群島の宮古島、石垣島にも寺があるという分布状態を示しています。この宗派的な内訳は、高野山真言宗が一番多く十カ寺、次が臨済宗妙心

寺派で七カ寺、真宗大谷派が二カ寺、真宗本願寺派が二カ寺という具合で、日蓮宗、浄土宗は非法人の一カ寺づつであります。

浄土宗の場合は、慶長年間に沖繩に渡った袋中上人の布教の結果、京都の檀王法林寺から派遣された小池さんという方が、戦時中に袋中寺を建立されましたが、戦後は亡くなっておられます。そして同じく布教師として伝導された吉田さんという方が、タマグスクという村に看板を桂林寺と名付けて、布教活動というよりは葬式の依頼があったら行なうというような形式で存在しています。こうしたわけで、仏教寺院を中心として沖繩の事情を語るといふ場合には、那覇市をめぐって考えなければなりません。現在十三カ寺、沖繩本島の半数以上の寺が那覇市に集中存在しています。

さて今、沖繩の仏教を語るにあたって、いつ頃どのような形でこの沖繩の島に仏教が伝来して来たかを、あらかじめ略説してみます。十二世紀から十三世紀にかけて、琉球王朝英祖王の頃、禅鑑という僧侶が沖繩に来て、極楽寺という寺を建立したのが仏教渡来の最初であります。

続きまして歴史上の主な事項を眺めてみますと、十四世紀に入りまして察度王の頃、正確には一三七二年、中国（明）と初めての通交があり、一三八四年に真言宗が伝わり、那覇

の大寺護国寺の開山の頼重法印が渡来しています。十五世紀に入って、白隠禪師が天竜寺を建てるといふ具合で、最初期においては主に真言、禅が伝わったというわけです。

そして十七世紀に入って、浄土宗の袋中上人が渡り、一六〇九年袋中上人が日本に帰ると間もなく島津支配が行なわれ、従ってある歴史書によれば、袋中上人はスパイではなかったかとされる見解もみえるわけです。このことは後述するように念仏の展開にも微妙な影響を与え、一六五九年、島津支配のもとに一向宗が禁止され、一六六五年には仏教の僧侶による布教は一切禁止されるという御触れが出ています。ここで仏僧の布教が全く禁じられ、更に民間の宗教活動も禁止されるようになるわけです（一七二八年刊『球陽』）。こうした状況のもとに、一八七九年（明治十七年）、沖繩県となり日本の地となるのです。その後は御承知の通り、悲惨な戦争やアメリカ軍の長い支配を経て、漸く日本に復帰するという現状にあるわけです。

こうした歴史の中で、仏教は一体どのような影響を与えたのでしょうか。実際、島津支配の後に仏僧の布教が禁じられ、いわゆる護国仏教と化し、仏教は琉球王朝の祈願所としての機能を果たすだけとなり、仏教の影響は殆んどみられない

というのが一般の見方であつたわけです。しかしながら、民衆の實際生活の中では、かなり深い仏教の潜在的浸透がみられるというのが、今度、沖繩へ渡つての現地調査からの一つの報告であり、現在仏教寺院が全然存在していない村でも葬式は現に仏式で行なわれています。しかも線香の類い、それにまつわる習俗、タブーも伝えられ、例えば無縁仏の供養として日本では水の子と称するお施餓鬼の時に茄子を細かく刻んで米を入れて水向けをするという、ミンスクーと称する習俗なども現在沖繩の各地で行なわれています。こうしたことから、仏教の影響は民衆の生活の隅々にまで入り込んでいるといえましょう。寺院という形態は残らなかったが、習俗としての仏教は残つたのではないかと思われまゝ。

ここでお念仏のことについて触れておきます。十七世紀に袋中上人が渡島し帰られてから戦争近くまで、浄土宗の寺院は建てられておりません。従つて残っているとすれば、風俗習慣の中に伝えられている以外にはないわけです。しかも浄土宗としてはこれは誠に残念なことなのですが、念仏者（ネンブツチャ）という言葉は、日本でいえば部落出身者とか、穢多とか、非人とかいう言葉と同じように使われています。なぜこのようになったのかというと、袋中上人の後、語り継がれて念仏の教えは民衆に拡がり、しかもネンブツチャがい

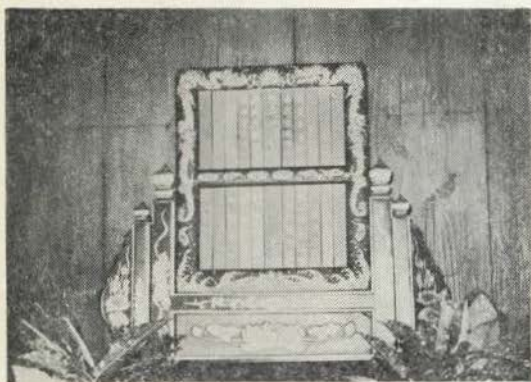
たという事実は全島に及び、離島の宮古島や石垣島にも存在していたということで、大正年間までそのネンブツチャなる人々がいたそうです。こうしてみると、袋中上人の布教は政治的なレベルで禁止されてはいたものの、民衆から民衆へとかなり広く語り継がれて行つたようです。

ところで、これは特に首里の郊外と那覇市、それから袋中上人の直接布教された那覇市のカキノハナとの三つの場所のネンブツチャを区別して考えないと混乱を来す恐れがありますので、区別して考えてみます。那覇のネンブツチャの場合はボウシチナ（棒をかついで仕事を待っている者）と呼ばれ、依頼があると長い天秤棒をかついでお葬式に行つて鐘を叩いて念仏を唱える、ということからネンブツチャのことをボウシチナと蔑んで呼んでいます。これは要するに、当時の賤民が食うに困つてお葬式を目当てに鐘を叩くということが半ば専門化されていたようです。これは首里のネンブツチャの場合もほぼ同様で、特にアンニャ部落はネンブツチャの巢窟とまでいわれ、ここにおきましてもやはり蔑称されて卑しまれておりました。

ところが袋中上人が居住し直接説教なされた那覇市のカキノハナという所では事情がいささか異なっています。区長が毎年ネンブツチャを選定し、お葬式に念仏を唱えるので



線香・酒・塩・餅菓子を供えてニタに先導されて巡拝する婦人たち—首里の寺院で—



—屏 位—

す。こういうことをみますと、カキノハナのネンブツチャだけは蔑まれた意味には使われず、お葬式にはいわば念仏講のような組織を作り、人々の家をまわったということです。このような記録が残っているわけですが、ネンブツチャという言葉がいつ頃賤民の呼称になったかというようなことはまだまだ研究の余地を残しておりまして、今回の調査だけでは到底結論づけるわけには行きません。

さて、今回の調査でお念仏に関するもう一つの報告と致しまして、念仏唄ということがあります。この念仏唄は殆んど共通致しておりまして、例えば鎮守流れという題で盆踊り（イッサ）の中に念仏が歌われています。この他盆踊りの中には維母親念仏などというものもあります。こうした念仏唄のモチーフとなっているのは親の恩ということで、一例として、八重山地方に伝わるミムマー念仏踊りというのは、

「親の跡目も取らず親より先に死ぬ子は、三途の川をなかなか渡れない。しかし、親の跡目を立派に継いで法事などでもきちんとして、あの世に来る者は、親孝行の念仏の行者として、三途の川へ来ると橋が遠く沖繩へ直結し、阿弥陀如来が手を取って極楽浄土へ連れて行ってくれる」というように歌われます。また本島南部のコチンダ村の念仏唄もやはり親の恩というものは非常に深いものであると綴々述べています。

こうした念仏唄からみまますと、袋中上人の布教は『父母恩重経』を中心に説かれたのではないかと窺えるわけです。ま

た、前述致しましたミムマー念仏踊りの内容は、明らかに二河白道の喩えがモデニフアイされたものです。このように考えて来ますと、念仏唄の殆んどは親孝行を説いています。この親孝行というのは、沖縄の民族社会研究の上には非常に重要なことでありまして、親孝行ということを含めなければ念仏というものも伝えることができなかったのではないのでしょうか。ともかくも沖縄の仏教の展開には、日本本土とはかなり様相を異にした沖縄の島々独自の土俗信仰というか、伝統的宗教意識というようなものが、微妙にというよりはむしろ覆いかぶさるが如く関わり合っており、仏教の信仰意識も表面では定かに捉えにくいものがあるようです。

付記

この後、講師藤井先生は、「自然崇拜と祖先崇拜が沖縄の宗教構造の二つの柱であります」と述べられて、迷信と俗信が深く入り混った沖縄古来の土俗信仰が二十世紀の今日でも強い勢力と説得力をもって存在し、それが沖縄の民族意識にどれ程大きな影響力を与えているかを、各地で収集された具体的な調査事例を存分に引証しながら、宗教学的民俗学的に沖縄の宗教構造の内容とその機能を余すところなく詳述されました。実は、今回の講演の中心テーマはむしろ、このように沖縄の民族宗教の根本形態を論じ、沖縄文化の全貌を細か

く説明されたこの後半部にあつたわけなのでしょうが、紙数の関係等の事情から講演の前半部のみを速記致し、紙上掲載させて頂きました。なお藤井先生は結論部分で次のような感慨を述べられています。

「沖縄の仏教事情を語る際、沖縄の固有信仰の上に仏教寺院が成り立っており、寺の選択権は一般市民にあり、仏教が今後沖縄で布教活動が続けて行く為にも、沖縄の伝統的な宗教形態を知ることなしには展開できないのではないのでしょうか。念仏というものも、ある意味では蔑まれたものとして受け止められている現状もある以上、仏教の布教というものは相当慎重な計画のもとになされなければならないと痛感致した次第です」

本講演は昨年の十二月四日、第十二回浄土文化講座と致しまして東京駅八重洲口鉄道会館ルビーホールにて行なわれましたが、本紙掲載の折りには紙数制限などからなかなか意を尽せぬものとなってしまっています。どうか都心近郊にお住まいの会員諸兄の皆様には、一般の方々共々お誘い合せの上、お暇をみて実際の文化講座に御出席下さい。

(文責・編集部)



私の恩師

に
じ
む
愛
情

鶴 飼 光 順

(京都家政学園長)

「卒業即失業」二十三歳で京都の仏教専門学校を卒業したのは昭和五年の春、町はエロ、グロ、ナンセンスに浮き身をやつし、初のトーキー映画出現の頃だった。

現在の高校は六―三―三と進む、旧制は六五三が原則、旧制高校の入試は激烈そのもので、一浪、二浪、三浪はザラで私などもその例に漏れない。自分は六―二(高等小学)―五―三と、中学入学は落第坊主であった。島根(出雲)の神門堂(桑門秀我老師)で小僧、小僧と呼び捨てにされ、一掃除、二勤行、三学問と、掃除と誦経に困惑し、三度もお寺の脱出を試み、叱責され冷たい母だと恨んだこと。小学四年の頃、村の祭りの太鼓の音に胸おどらした。小遣い欲しさにこっそりと本尊前の賽銭箱を開いて、師から厳しい制裁をうけた。冷た

い汗の流れる心の傷は今尚消えない不始末な行ないであったことなど思い出は尽きない。二度も中学入学を失敗して、胸に五つの貝ボタン、軍国調の巻脚絆、赤いゴムの編上靴(脱げばいやな臭気霧々)「ハイッ」と敬礼よろしく通学したものである。杵築中(現大社高)通学はとてもうれしい限り、寺庭の作務から開放され未知の世界へ飛出せる期待もあったであろう。代数零をとって数学教師をさか恨みしたり、英語の安田、また服部先生にアランボーの「黒猫」の話をねだって話術の優劣をつけたり、国語のオボツちゃん先生を怒らしたり……先生方に済まないことばかり――。

「禁断の実」「酒も飲めない弱虫」なんていわれることは嫌だった。上級生になる頃ガブ呑みしてにわかに気が大きく

なり、騒いでゲゲエやったにがい経験、中学では無論酒、タバコは大禁物、でも先輩は、胸まで深く吸うとおいしいぞ——お互い不良、悪友、善友入り乱れての交歓もやったこと。活動写真（映画）も無許可では入れなかった。でも「坂妻」の股旅ものなど、ブカブカドンドン楽入りでやられると、たまらなくなり、冬の宵の活動館など、女の髪の毛の匂いが鼻について、ひどく興奮して、自分はオマセなのか、胸がドキドキして生理的現象にもあたったこともあった。未知な青春を多感一杯うかうかと暮して卒業した。母は赤飯たいて祝ってくれたが内心じくじたるものを感じながら、師の許可を得て入浴した。仏教を専門に取り組んでゆく。

仏教専門学校（現仏教大学）に入学し、実のある浄土宗を学んだ。世間は当に卒業即失業の恐慌時代だ、いかに生きるか、ブレーキは理性のみ、間違いだらけの青春であつてはならぬと、寮監の恵谷隆戒師は戒を説いて下さった。

“個性的な顔” “四十になったら自分の顔に責任を持て” とはリンカーンの言葉だ。顔は親からの授かりものだが、それに深みを与えるも与えないのも結局自分である。自分の顔は自分で作りあげるものと教えられたよき時代に、豊富な人生経験を喜びも悲しみもこめて自分の中に生かして下さったよき師を、石橋誠道大僧正、前田聰瑞、小西存祐、小笠原秀実、塚本、三枝樹各先生等々挙げるのに暇ない。

“かえす心” 自分の過去をふり返ってありがたく感謝の心を抱くのは、くじけない希望を与えて下さった先生方に何といても無条件に頭がさがる、“めぐり合い” がよかつたと思う。教育の根底に流れるものそれは自分の喜びをわけつ“かえす心” しあわせをかえす。いやな思い出をかえさないとうけとめた。先生方には一言一句にじむ愛情があつた。

本物と

偽物

北林 余志子

（作）
横浜市中区石川町在住 家

わが師岡本綺堂が、麴町の元園町から目黒の西郷山へ移られてからのことだった。毎月二十五日が例会で、先生のお宅

に弟子たちが集ることになっていた。何年頃のことだったか、たしか暑い季節だったと記憶する。

広い庭に面したお座敷の床の間に、桔梗かなにかが活けてあって、清方の美人画が掛けてあった。私はその清すがしい風情に

「先生、清方さんですね」

と、思わず口を出したのだった。

「いいだろう。こりゃアね、君、婦人雑誌の附録だったのだよ」

えッと私は耳をうたぐって、じっと画を見つめた。氣の利いた本表装がしてあって、どう見ても婦人雑誌の附録などとは見えない。先生が御冗談を仰有ッてらっしゃるのだろうと思つた。すると

「近頃の印刷技術は大したものだね」

と、先生は淡々と付加えたのだった。

その頃は私も若かったので、先生ほどの大家なら、清方の本物を二つや三つ持っていたって不思議ではない。何うして、婦人雑誌の附録なんかわざわざ表装させて、床の間にかざったりなさるのだろう。舞台の小道具でもあるまいにと納得いかなかった。まさか、なぜ本物をお掛けにならないのですか、などと失礼なことも伺えず、その御本心は解らず終いになつてしまつた。

だが現在、私ももう先生の亡くなった時の年齢よりも三年

も長く生き延びているので、先生の偉大さがしみじみと解つて来たようである。先生はあの時、弁解らしいことも訓戒めいたことも仰有らなかつたけれど、私に大家の風格というものを、それとなく示しておいでになつたのだと、やっと氣がついた。

近年は泰西名画の偽物に大金を払つて自慢している人もいるようだが、いかに巧みに寸分たがわず模写してあつても、模写は所詮模写でしかない。それなら、たとい印刷物であっても内容は本物なのだから、本物らしい偽物よりも確かな本物だということになる。

「いつも本物を愛せよ。君自身も誰れかの模写であつてはならない」

ときびしい戒めだったのだろうと思う。だが、ホンモノになることのむつかしさよ。誰れの真似でも模写でもないものを作り上げるなんて容易ではない、とこの頃のテレビの捕物帳群を見ながら改めて溜息が出る。

半七捕物帳が世に出てから今日まで、数限りもないほど「捕物帳」が出た。野村胡堂氏は私に、綺堂先生の本を机の上に置いて書いている、と正直に仰有つたことがあつたが、銭形平次には銭を投げるという一つの型を独創なさつた。失礼だが、ほかの作家のはまるで引き写しか亜流である。親分

の名が変っただけにすぎないスタイルが出来上ってしまったている。それをまた役者たちまでが、岡ッ引といえど誰れでも鬻の刷毛先をチョイと擧げているから（平幹二朗の半七の鬻はお行儀がよい）。ますます混乱して来てしまう。

一流品のレッテルと見紛うような商標をつけて売っている商品があつたり、世はまさにニセモノ時代のようだ。他人のやつた派手な行動を、われもわれもと右にならえするばかりしさも、ニセモノ氾濫の感がある。

薬屋のおにいちゃん

きりぶち 輝

（童話作家）
（東京都練馬東大泉町在住）

「だんなさん、ハイキングに行きなさい！」

一昨年の十一月、顔面二か所の毛穴がつまり、その下に脂肪が集まる「粉粒」という奇病にかかり、一週間入院して剔出した。

医者には「また集まってコブになる子供がたくさんあるが、予防法はない」と悲観的なことを言う。そこで、行きつけの薬屋に行つて相談すると、店番のおにいちゃんが明るい声でこう言ったのだ。

先生の御臨終の五日ばかり前のことだった。弟子たちが枕元に詰めていた時、先生が私に座蒲団の心配などなさるの

で、お気などつかわないよう申し上げたら、
「わたしは銭はつかつたが、一度も気なんかつかつた事はなかつたよ」

とお笑いになった。

先生は偉大なる本物だったから、こせ、こせと気などつかう必要はなかつたのだろう、と私は思っている。

つまり、ハイキングをして汗をかき、血液の循環をよくすれば「粉粒」の予防になる、著述家の者は運動不足になりがちだから、歩くことが健康上にも最もよい薬というわけ。

とはいへ、終戦以来ハイキングなどしたことはないし、どこへ行つてよいのやら……。

（どこか山に登つて、ああつかれたで終わってしまったら予防法にもなるまい。何か長続きするハイキングはないものか。）

それがあった！ 車内広告で知った秩父三十四か所巡拝だった。納経帳を買ったので一番で終えるわけにはいかない。さあ、それから憑かれたように西武秩父駅からてくてく歩いてお寺巡り。多いときは一日二十キロ以上も歩き、汗をかいてたどりついた古寺で合掌する気持ちはまた格別だ。

これがやみつきになって、坂東三十三か所を始め武蔵野三十三観音、西国三十三か所にも挑戦したのだから、われながらすごい熱の入れよう！とうとう今までに九十一寺の納経をすませてしまった。

「いよいよお迎えが近いんじゃないか？」

友だちは笑うが、おかげで「粉粒」の子供は退散するし、それまでのカーキチが愛車を売りとばし、歩くことに興味をおぼえたのだから、友だちもあきれるはずだ。

ところが、始めのうちは「行無心求道」（無心に行つて道を求む）などと自分流のことは作つて、仕事を忘れただ步こうと思つていたのが、しだいに商売気がでて、童話の素材探しを兼ねるようになり、今ではカメラ二台に望遠レンズ、三脚まで持つて石仏撮影にまで手を出ようになったのは誠に行きすぎ。とはいえ、こうなると、仏の道をより深く知りたくなって、仏教関係の書物を読むようになり、まさしくデイスカパー念仏である。恩師と言え、足をどこに向けて寝

たらよいのかとまどうほど多いが、仏の道を教えてくれた薬屋のおにいちゃんも、私の恩師の一人に数えたい。

水を飲もうと思わぬ馬に、水を飲ませることはできないとよく言う。それなら、その水の上にフスマをまけば、馬はフスマにつられて水を飲むことだろう。私もハイキングにつられて古寺行脚から自分の寺のことまで考えるようになったのだから……。

「最近、地図とコンパスを使って目的地を探すスポーツ、オリエンテयरリングが流行しています。週休二日といつても遠出は金がかかるから、区、町、地方の寺々を、こうした方法で巡る日帰りコースがほしいですね。」

これはたまたま知りあつた石仏観賞趣味の若者のことばだ。そういえば若い人のお寺巡りもふえているとか。たとえ由緒ある本尊や寺宝の板碑がなくとも、各寺にはそれぞれの風格があるから、それらをたどるのも趣があらうというもの。

寡聞にして私はまだ知らないが、こうしたコースがあれば、我が恩師「薬屋のおにいちゃん」をともなつて行くことだろう。



一枚起請文講説(2)

井川定慶

(文 博)

法然上人はまだ勢至丸と称した九歳の春、父の漆時国公の不意討ちの最期にあい、その御遺言を永く耳底に留められ、父の仰せに従い「一切衆生が容易く救われる法門を」見出さんものと精進なされることになりました。

ところが比叡山で御修行中、早くも「智慧第一の法然房」と皆から推賞されるのが上人には却て御氣に召さず黒谷に隠遁され、更に奈良や醍醐の方面に遊学して先輩の教えを受けて志されたが、教えて貰う師匠とてなく、遂にまた黒谷に戻り報恩蔵に閉じ籠り、釈尊の説き遺されし一切経五千余巻を繰り返し四遍までも閲覽せられたるに、善導大師の観經

疏に導かれ、戒法も禪定も智慧をも必要とせずただ口に南無阿彌陀仏と称えることのみが、弥陀の本願に従順し、釈尊の出世の本懐にかなひ、六方諸仏の証誠を蒙るなりということを胸中深く会得されて浄土宗をお開き頂いたわけです。

ところで「念仏」といつても昔から説いている觀念の念仏ではなくして口称名号の念仏であることを上人は説いて来られたのです。が、今や一枚起請文を認められるにあたって口称名号のありがたさをハッキリと論されています。

そして念仏で往生させて頂くについて、或

は安心、或は起行、そして平生の心得として四修、三種行儀などは必要ではあるが、それとても別に知らなくともよろしい、唯だ南無阿彌陀仏と口称さえするならばそれらのことが、六字の名号にこもりますぞえと論されています。即ち

「但し三心四修(など)と申すことの候は皆決定して南無阿彌陀仏にて往生するぞとおもううちにこもり候なり」

と書き記されました。浄土宗の第二祖鎮西国師聖光房弁上人は此の法然上人の意のあるところを、つまり「結婦一行三昧であります」と『末代念仏授手印』に図示して後の世にお

伝え下さいました。この事は五重の第二重の巻物としてお話を聞かれるでしょう。

かように口称という簡単なようであるが、実に慈愛の籠ったお念仏でありますから、仰せのまま素直にうけとり信じて実行（念仏を称える）さえすれば往生疑いなしです。それを若しも、「どうもそれではまだまだおぼつかない。もっと何か奥深いゆわれでも秘められてはいないか」というような考えを起したならば、それこそ、弥陀、釈迦二尊の御慈愛に外れてしまいますぞよとまで上人は申されるのです。即ち

「二尊のあわれみに外れ本願にもれ候べし」と記されています。

尚、法然上人は往生浄土を願求するものは学問を必要としないことを更に言及されています。

たとい一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じうして智者の振舞いをせずしてただ一向に念仏すべし

と仰せられます。然しかように無智の輩に同じく（同愚）とか、釈迦一代の教法を知り尽

くしていても愚鈍の身になし（還愚）てとか、よくいい論されますが、浄土宗では学問や研究を排除せよというのではありません、研究は大いに結構なのです。

法然上御自身が、「われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者華洛に乱入の日、ただ一日聖教を見ざりき」と毎日経文を見つづけ研究していたと述懐されている。是れは上人五十一歳の寿永二年七月の出来事でありますから四十三歳で浄土開宗されて八年後のことでありますし、また建久九年には六十七歳にして『選択本願念仏集』を撰述されるほどでありまして、上人は決して研鑽を排除されてはいないのです。上人の仰せ論される御精神は「智者の振舞いをしてはいけない」、高慢ぶり、知ったかぶりをせないようにとの誠めであります。還愚の「還」は「そのまま」とか「ながら」と訳すべきで、愚者は愚者のまま智者は智者ながらとうけとるとよいのです。されば兎角の想いはからいなく、ただ額にお念仏を申しなさいとキツパリとお諭しなされていきます。そして末尾語として「証の為に両手印を以てす」

と記されていることです。昔から本人の意思を証明するために両方の手の掌に朱とか墨汁を塗ってそれを文書に捺すことが行われていました。水無瀬神宮に奉納されている後鳥羽天皇の宸翰御遺告（国宝）とか文覚四十五箇条起請文（神護寺蔵）などはその一例で有名です。

上人もかくかくの次第を書き記したが是れは全く私の真意であって間違ひありませんという証拠のための手印と拝察せられます。

更に言葉が続かさずせられまして、「浄土宗の安心、起行此の一紙に至極せり」もう此の一枚に書き尽しました。「源空（法然上人）が所存此の外に全く別義を存ぜず、滅後の邪義を防がんがために所存を記し畢んぬ」私の亡くなった後でとかくの異論邪義の起らないことを望みまして、書きましたのだとの思召しと拝せられます。そして最後に「建暦二年正月二十三日 源空」と御往生なされる（二十五日）の二日前の年月日と御署名とが施されているもので、浄土宗徒が拳々服膺すべき御法語であり、毎日拝読してよいよい信根の培養に資して行きたいものです。



ねはん会法話

灯火消ゆ

山口 諦 存

(浄土宗務庁教化部長)

冷え切った大きな本堂の天井から高く掲げられた大涅槃像の中央には、横臥された金色のお釈迦さまが瞑目せられ、あたりを取まく師を失った弟子・信者・鳥や獸にいたるまで、生きとし生きるものの悲嘆する姿が死の恐怖となつて、寒さは一入きびしく、降り出した雪とお接待にいただいた「あられ」の記憶がなつかしく思われます、お釈迦さまのご入滅は涅槃（ねはん）といい二月十五日と伝えられています。

三十五歳にお悟りを開かれましてから四十五年の長い間、その人その人によく理解できる、いわゆる人を見て法を説きつづけられました、人間として八十の高齢に達したお釈迦さまの身は既に老い衰えていました。

生来、頑健ではなかったらしいお体には、時々背の痛みがあり、ご説法にも耐えかねて時には偉い弟子に代らせられることもあったようです。しかし倦まずたゆまぬご説法の旅は、なおも病老の身を鞭打つてつづけられ、ガンジス河を渡って北方ビシヤリの辺についた頃には恐ろしい雨期に入り、老衰の身は特有の暑さと長雨に堪えかねて、病苦と闘いながら雨安居（うあんご）を過ぎようやく死からのがれて、更に勇を鼓して弟子たちを伴い北へ北へと説法の旅はつづけられました。

それは死への歩みを予期していられたように思われます。たまたま、供養の葺を召して又重い病を得、腹くだりつつ遂にクシナーラーの沙羅の林にたどりついた時、

その体力はつき果てて一步も運ぶことはできなくなりました。

「アーナンダ（阿難）よ、わたしは疲れた。わたしは横になりたい。この沙羅の双樹の間に、頭を北に向けて床をのべてくれ」とのお言葉に、高弟アーナンダは急いで床をととのえました。右脇を下に、右足の上に左足を重ね、西に向って臥し、いよいよご入滅を待たれるかに拝せられました。アーナンダは師のご臨終の近いことを知りさめざめと泣くばかりです。

やがて、アーナンダを招かれたお釈迦さまは「悲しむな、なげくな、常にわたしは教えたではないか、愛する者とは別れなければならない、形をもつものはすべて壊れるのだから。そなたは長い間わたしにかしづいて、身廻りの世話をよくしてくれた。どうか速かに悟りを得るがよい。わたしが今日まで説き教えた教法と戒律とは、わたしの亡き後、そなたたちの師となるのだ」とお諭しになりました。このことばは人間としてのお釈迦さまの心情があふれ、師の弟子への心細やかな思いやりがにじみ出ていますが、法を師として道を行ぜよとの垂訓は厳しいまでに冷徹でありました。

まもなく、病の師は弟子たちを呼びよせて「疑いや惑

があるならば、今疾く問うがよい、わたしの滅後になつて悔を残しても及ばないことであるから」と促されることと三度、けれども弟子たちはみな黙つて声を出すものはありません。

「師よ、もはや一人として疑いや惑を残すものはないと信じます」とのアーナンダの答えを聞いて深くうなづき、しばらく思いにひたり、静かに最後の言葉が聞えませんでした。

「諸行は壊法（えほう）である。放逸なることなくして精進せよ」

すべてはうつり変りゆくものである。ほしいままなるまいをせず、懸命に道をつとめ励むのだ。

覚者として導師として類いない聖者は今、永遠に眼を閉されました。

「この時、中夜寂然として声（おと）無し」と説く仏遺教経のことばは、この情景をよくいい尽しています。

涅槃（ニルバーナ）を滅度とよび、薪が燃えつくして静かに消えてゆくように、障りを滅して苦を度する——あらゆる精神的障害をなくして苦を渡り、命を完全に燃焼されたお釈迦さまの死を、あらわすことは、まことに覚者にふさわしい術語であります。

涅槃の昔と今日は既に二千幾百年をへたて、処も遠く離れてはいますが、この時間と空間を越えて聖者に直参する道を、お釈迦さまの説法を通じて心静かに聞きましよう。

「法を見る者は、われを見る。法を見ざる者は、われを見ざるなり」

お釈迦さまを去ることをかこつ憂いが、この暖かいおことばによって医やされることは、限らない喜びではありますまいか。

新刊紹介

北山宏明 著

『男と女のはなし』 人生相談

著者北山宏明氏は、昭和十三年大正大学を卒業後、静岡県焼津市教念寺住職を拝命。法務のかたわら焼津市文化協会を設立し、その後地元小川町の教育長、焼津市の教育・福祉関係の役職を勤め、現在収入役および焼津市誌編集執筆委員長として活躍中。本書は著者長年の豊富な体験のもと、地元紙

法然上人は「南無阿弥陀仏と唱え給へば、住所は隔つといへども、源空に親しとす。源空も南無阿弥陀仏を唱へたてまつるが故なり」と仰せられました。

お釈迦さまのご本懐であります念仏を称えることによつて、法然上人にまみえ、更にやがてお釈迦さまのお心に帰入することのできる幸を、うれしく思うのであります。

「就中阿難の嘆き涅槃像」

志太ニュースの婦人相談欄の解答者として接し得た、数々の人生問題の中、百例を抽出しまとめたものである。今日の複雑化した社会は、いろいろな人生トラブルを起す要因を秘めており、現に新聞・テレビ等で絶えず報道される悲劇には、胸つまるものがある。本書はその事例ごとに著者の明快な回答が載せてあり、今後の私たちの生活上の諸問題の解決に一助をなしてくれるものと思う。(B5版・一九二頁・価四五〇円)

問合せ先 焼津市小川三四九番地 北山宏明



異僧「真覚」

第二回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

「やっぱり清やんや。うまいもんや」

「和尚さんもビックリしよるで」

「うちのお母はんもきつとビックリや。清やんが作った言うたらよけビックリや」

「わい、わい、騒いでいる処へ和尚も出て来た。」

「どや出来たか？ あれはお化けか。なかなかよう出来とるぞ。うん？ 此れは何や？」

和尚は無数に小さな穴をあけた南瓜を指して首をかしげた。

我武沙羅に作業をつづけて汗ビッシヨリの顔を腕でなでくり廻していた清八は、和尚を見上げて団子鼻をビックリと動かした。色が浅黒く、ずんぐり丸い体つきの彼は、仲間から「団子、団子」と呼ばれていた。彼の鼻の形からそう呼ばれ

たのかもしれない。「色が黒くて甘い」そんな意味合いも含まれているらしかったが、彼は一向そんな詮索もしなければ、気にもとめていなかった。彼がその団子鼻を動かすのは、得意の時の最大限の意志表示である。彼は和尚に答える代りに言った。

「和尚さん。今晚ローソク三本おくれやす」
一寸怪げんな顔をした和尚は、それでも、

「うん。よっしゃ」

と案外心よい返事をしたあと

「さあ、もう『作りもん』(子供達の作品を和尚はこう呼んだ)も出来たし、そろそろ夕飯の時刻じゃ。みんな早よ帰って飯くうて来い」

と、境内は散らばっている子供等に胸間声を張りあげた。



三十人余りの子供等の姿が掻き消すように無くなると、和尚は手をうしろに組んで、又一つ一つ清八等の作った細工物を見て廻った。境内の真ん中に張り出した松の枝に吊された穴だらけの南瓜が、有るか無きかの風にくるりと廻った。

——物覚えは至って悪いくせに、斯ういうことにかけては格別じゃ。ふん。ほんまに怪ったいな奴じゃ——

南瓜に清八のうす黒い顔が重なり合った。それを眺めて首をひねる和尚の、もう五十歳に近い頭部の銭形の禿が一つ夕闇の中に取り残されていた。

月輪も一里山も共に、湖南を瀬田の唐橋に向う東海道ぞいの部落である。月輪のすぐ西が一里山、その距離は五丁とは離れていない。清八は夢中で食べたい。美味くも不味くも

なかった。唯無性に腹が空いていたのと、一刻も速く寺へ行って、南瓜に灯を入れてみたかった。彼は南瓜に穴をあけることに依って一つの賭をしていた。その中にローソクを灯せばそれが一体どんな光の効果を發揮するか？ 俄かに思いついて作ったものだけに答えが判らない。それをあれこれ想像することで頭は一杯であった。

「清八！ お前これで六杯目やで。未だ食べるのかいな」
おちまが彼の差し出す茶碗をうけとろうともせず、そう言った時、彼はやつと我にかえった。茶も飲まず、形ばかりに掌を合せると裏の畑に廻った。みんなが使った行水の残り湯のうす濁りが湯気も立てずに静もりかえり、鹽のへりに掛けた手拭を伝った湯が、土に黒いしみを作っていた。

彼は手拭で顔だけをつもりと撫でると、

「早よ行こ」

と治作を呼んだ。治兵衛の長男で彼より二つ歳かさである。治作にとつても新福寺の地藏盆は楽しかったが、清八のように慌てる理由は何もなかった。それに皆が集まらなければ始まらぬことも知っているから普段同様のんびり箸を運んでいる。清八は土間で行ったり来たりジダンダを踏まんばかりに焦々している。そんな様子を眼の端でチラッと見やつたおちまは、

「いつものろまのくせに今日に限って何や、せつちしい」

と、独り言のように、それでも食卓にいる家の者だけには聴かせるつもりでぼやいた。

「ええがな、ええがな。地藏盆は清八が居らんと始まらんのや。何せ作りもんの名人やさかいにな」

治兵衛が屈託なさそうに、そして清八を一寸かばうように言った。箸を置くとおちまは、治作と妹二人に去年作ったものではあるが、糊の立った浴衣を出して来て着替させた。そのゆっくりした動作は、如何にも清八に対するあてつけのように見えた。

「清八にも……」

と言いかけて治兵衛は慌てて口をつぐんだ。おちまの眼がせわしく動いたからである。そんな夫婦のやりとりで清八はいたたまれぬ思いで戸外にとび出した。

人通りもまばらになった街道を急いだ四人が寺についた頃には、ウラ盆をすぎて、やや短くなった日はすっかり暮れていた。

和尚が燃えさしのローソクを詰めた箱を持って本堂の椽に現れると、子供等はつツと和尚の前に駆せ寄った。和尚はすぐにそれを渡そうとはせず、

「お前ら火遊びしたらあかんぞ」

と、言いかける後をとって

「しょんべん垂れるで」

子供等は声を揃えて合唱するように続けた。

「そやけど今日は特別や。お地藏さんにお火あげるんやさかいにな」

和尚はさも驚いた風で、

「おう。よう知つとるの」

「和尚さん毎年おんなじこと言うてローソクくれるやないか。もう覚えてしもうた」

子供等は又一せいに囃した。和尚は手早く太目のローソク三本をより出すと、真ん前で眼ばたきもせず待っている清八の顔にさあと突き出した。子供等は和尚の渡すローソクを次々と引つたくるように掴むと、地藏堂を頂点に八の字に張った繩に吊られためいめいの行灯の下に走った。行灯の絵は、どれも似たりよったりで、蟬やトンボや、雪だるまのような地藏さん、金魚や西瓜の画に限られている。そんな稚拙な墨絵も中に灯を入れて、ゆらめく炎にすかして見ると、何となく美しいものに見えるから不思議である。清八は加茂瓜のお化けの中へ、丁度眼玉に当る部分に火をつけた二本のローソクを入れた。途端に二つの眼がキラキラと光り、赤い舌がゆれるように見えた。



法然上人と母 (第一話)

三田全信

(仏教大学教授)

一、片目魚の謎

今年新幹線が岡山駅まで開通する。岡山駅から津山線がつながる。津山線の中に誕生寺駅がある。その駅から一キロ北方に法然上人の生家があり、今は誕生寺という寺になっている。此の地は昔美作国粟郡南条稲岡北庄祈社といった。周辺は大きな山とはなく、なだらかな丘陵地帯で、筆者が訪れた頃は夏で稲に吹く風がとても美しい稲波を立てていた。往古より津山を中心とする農村文化発展の村である。津山は有名人の出生地である。江戸時代には漢方医宇田川道紀、箕作阮甫が出ている。明治以後には箕作麟祥(法学博士、男爵、わが国の成文法の起草者)、箕作佳吉(動物学者)、箕作元八

(西洋史学)、美濃部達吉(法学)、長岡半太郎(理学)、菊地大麓(元文部大臣、数学)、坪井忠二(地球物理)、諏訪繁樹(理学)、呉文炳(前日大総長)、日高第四郎(元国際基督教大学教授)、末広厳太郎(法学)、木田安(文部省社会教育局長)、木村栄一(日本医科大教授)、美濃部亮吉(現東京都知事)、鳩山道夫(ソニー常務取締役)、坪井誠太郎(地質)、箕作祥一(日大農学博士)などの名士を産み出している。また津山に近い稲岡から法然上人のような宗教的偉人が出生している。紋章学の沼田頼輔先生が漆間家の家系を調べて編纂された『立石家譜抄』によると漆間家は立石家の分流で、立石家のもと九州日向にあって紋章が杏葉であることから大友家につながりがあり、大友能直の弟に親茂という人があってその流は立石

から出たもので、美作の立石も恐らくこの流れであらうとされている。大友家はこの家紋を大切にし功臣に榮譽のしるしとして許したという。美作の立石家は現在まで存続し当主は立石欽一氏で中国交通の社長である。筆者は二回ばかりお会したが、その御容貌は法然上人の木像の御影に全くよく似ておられるので目を見張るばかりに驚いた。そして法然上人にお出会ったような親しさを感じた。

伝説では法然上人が九歳の時源内武者定明のために夜討にあい、父時國公が深手をうけて入滅されるが、上人は小兒ながら小弓を執って敵定明を目がけて矢を射られたところ目に当り、定明は裏の小川でその傷を洗った。ところがその小川に棲む魚が皆片目になったというのである。アルコール漬けた魚を見ても片目である。現に筆者が訪問したとき寺僧が片目の蛙を捕えて示してくれた。なるほど片目である。だが筆者はふと頭に浮んだのは放射能による遺伝分子の破壊という作用である。津山から奥津温泉を経て、山陰の三朝温泉に通ずる途中に人形峠がある。この峠は今やウラン鉱の産地として有名である。奥津温泉も三朝温泉も泉質は同じラジウム含有量の多い温泉である。福岡附近も恐らく天然放射能に豊富土質であるかも知れない。もしそうだとすれば遺伝に変化を与えると共に異状なまでに発育を促進することもあるという

現象から、智慧第一と呼ばれた法然上人のような優ぐれた僧が出たり、伝統による教育環境という原因もあらうけれど津山藩から多くの人材を出した一因が秘められた天然ウランの作用であるかも知れない。殊に法然上人の母秦氏は異種族の血をもつ人であって優生学的な素質改善が期せずして行われた結果とも考えられる。恐らく将来医学の進歩によって天然ウランの謎も解明される事もあらう。

一、母と子

法然上人の父時國公が何者かに暗討ちにされたのは、正しい伝記では九歳の時でない。叔父の観覺得業の熱心なすすめによって、ただひとり子であったけれども、比叡山に登らせて僧にしようとして両親が決心されたのは、深い信仰から観音さまへ祈願して得た授け子だったからである。私のものではない、仏のもので仮に宿られたという信仰からである。事件は上人が十五歳で比叡山に登られてから三年ほど経て起ったのであった。父時國公は別れの時自分の死を予言して菩提をとぶらってほしいと言いのこされている。この悲しい知らせが山へついたとき、上人は悲歎に泣きぬれ、ひとり子である私の望をいれて比叡の山へ学行のために出してくれられた父が、こともあらうに敵の手にかかって果てられるとは。この

ような悲しいことがまたとあらうか。ああ悲しやはかなしやもう学行もなにもいらぬ世を捨てた隠遁者にならうと考えて師の寂空上人にこの由をのべられた。寂空上人は何というかとぞ隠遁者でも学問をしないでよいということはない。父を思うならば父の願を胸に刻んで一層学行を励んでこそ孝養であらうとと誠められ、それから寝食を忘れて学行に励げみ智恵第一の法然房となられたのである。法然上人が二十五歳の時十二歳の可愛い小僧さんが師の御房のもとへ弟子入して来た。これが法蓮房信空上人で、中山顯時卿の孫、顯時卿は寂空上人と師檀の約を結ばれた人である。ところが月日が流れて法然上人は四十二歳、信空上人は三十歳になられた。師の寂空上人もそろそろ老境に入り後継の問題を思案されねばならなくなった。一の弟子の法然上人にすべきか、師檀の約をむすんだ葉室家の信空上人にすべきか、寂空上人は心中大いに迷われた。この師の心中を察し、自分は師檀の約とてない身、師の御房の迷惑にならぬようにと、仏道修行のためといつて、ご自分の弟子真観房感西をつれて西山の広谷へささやかな庵を建てて移住されたのである。真観房はここで炊事掃除など法然上人の身廻りの世話をした。上人はそれから大阪の四天王寺に暫く留まり、奈良の法相宗の学者藏俊僧正に面談されたが、僧正は上人の学識に舌を捲いて驚いた。見

ればみすばらしい麻衣を着た野僧である。ただ人でないと感じた僧正は生涯経済援助をしようと申出られた。帰途宇治平等院の宝庫で善導大師の観經疏の完本を見て歓喜踊躍強い自信を得られた。年が明けて、とかく不便な広谷を去って五条中納言邦綱卿の世話で青蓮院覺快法親の許を得て吉水の兩界堂を借り移住されることになった。法然上人の開宗は此年である。数年の間に法然上人の名は郷里の叔父観覺得業やお母さんの耳に入るようになった。二人はすでに七十の坂を越しておられるが、今の機会を失ったならば後に会う機会は最早ないと手にとりて杖を頼りにはるばる京へのぼりおよそ三十年振り涙の対面をとげられたのである。

三、母への孝養

三十年という長い月日を美作の片田舎で暮らされた母、その間に時国公の痛ました傷害事件を味い、杖とも柱とも頼む我子にも生き別れ、尋ね行こうとしても女人禁制の山ゆえ涙を呑んであきらめねばならなかった。地獄の迫害よりもつらい心、女ゆえに愚痴も出たことであらう。昔の女性には現代のように自由ではなかった。ひたすら男性への服従が強いられただのである。夫唱婦随という言葉がある。これは夫婦の美德とされていたのである。浄瑠璃の先代萩の乳母政岡が自分の

子を犠牲にして主人の子を護る物語に大衆の同情と涙が注がれる。母子の愛情は苦しい環境におかれればおかれるほど熾烈なものがある。現代は我子でさえ忘れる人があるから驚く。万博の迷子事件放置事件は一体どういうことなのであろう。

法然上人の開宗は実は社会的には女性解放につながるものが甚大である。その当時女は五障三従のさわりがあるとして仏になることは勿論近づくことは嫌われたのである。五障というのは修道の面では煩惱障(心をなやまし身をわずらわすさわり)、業障(悪いはたらきのさわり)、生障(つみをうむはたらきのさわり)、法障(よい行をさまたげるさわり)、所知障(正しい智慧をさまたげるさわり)という五つのさわりである。三従というのは、(一)幼い時は親に従い、(二)若い時は夫に従い、(三)老いては子に従うという逆を行うことである。法然上人は他宗からこのような理由で嫌われた女性でも一心に阿弥陀仏にすがって念仏すれば往生が出来るかと説かれたので、他宗からは激しい批難があったけれども、阿弥陀仏の本旨はそこにあると教えられた。

法然上人のお母さん泰氏が、はるばる京都へ上って法然上人に教をうけられたのも、今までは女人は近づけなかった仏の教に、たやすく近づくことが出来るばかりでなく、男性と同じように念仏すれば往生が出来るという教が聞かれるとい

う希望があったからである。もし従来と同じであるならば旅は憂いものと考えた時代にどうして命がけで京へ上る必要があったのだろうか。勿論三十年も会わない我子に一目でも会いたいと考えて所詮会うことは許されなかったからである。

ところが上京して会うことが出来たばかりでなく庵室まで造って、朝な夕な孝養をつくして貰った母の喜びは、地獄で仏に会ったほど嬉しかったに相違ない。仏教の根本は父母から離別して相苦むことではない。孝養が基本である。そのうち法然上人のお母さんはどうされたか伝記から姿を消して安穩な念仏生活を営まれて吉水で亡くなったに相違ない。七十幾歳の老母を再び故郷へ送り還えされたとも思えない。とするならば現今知恩院の山上にある広大な墓域のどこかに葬られているに相違ない。隆寛律師の遺骨もこの地に収められていることは伝記にありながら、本拠を求め得ない。歴史の謎は依然として解けない。有信の人よ。この謎をといて頂きたい。

＝ お 願 い ＝

先月号でお知らせいたしましたように、本会会費を諸事情により値上げいたしました。意をくみとりよろしくお取り図いの程お願い申しあげます。

新会費(年額一、二〇〇円・旧一、〇〇〇円)



紀 行	誕生寺
--------	-----

あ　る　随　想

磯　貝　基　教

(山梨県甲府市尊体寺住職)

老に近かつきつつある家内が常日ごろ法然上人の降誕地の誕生寺と倉敷の大原美術館、民芸館とを是非に観たいとの希望があったのと、私も仏者の片端しではあるが何か欠けているものがあるという満ちたれぬ気持ちに道心を深めたき気持ちがあつたので、秋彼岸をおえると、そおそおと出かけた。

道中八時間の汽車の旅は極めてきついものがあつたが、永年の教員生活にて欠けている、道心の高めと、浄土宗他力念仏門の開祖である法然の降誕の聖地という魅力に引かれて心はずませて修行のつもりで出かけた。岡山の公務員宿舎を午前九時に出発して津山線誕生寺駅へ約一時間の行程にて車をとばせた。案にたがわず素朴な山合いにひなびた田舎風景にめぐまれた豊かな、くったくのない辺地が展開された。道をきく老婆の答えも情のこまかい素野な親切さにあふ

れていて気持ちすがすがしかった。

正徳五年再建といわれる素朴な誕生寺山門と筋躰を通り寺務所を訪ずれると小柄な執事さんが親切に応待された。木造の御影堂(本堂)は元禄八年三回目の再建といわれ開基は熊谷蓮生坊といわれる金堂にて誕生寺縁起と開張を修行していただき、上人像をまのあたりに拝することが出来まして何ともいわれぬ清浄な感にうたれた。本堂須弥壇の位置は上人誕生の室のあつた所で本尊は四十三歳浄土宗開宗の時に自作された等身の上人御自身の御像で爾来八百年の霜雪を経て法灯絶えることなく全浄土教徒の魂の故郷と敬仰されている法然上人、円光大師二十五霊場の第一番とされているという。私の寺の歴代と檀信徒先亡の追善回向を修めていただき、私住職としても庶民仏教の念仏門の元祖法然上人の恩徳を慕いたい、

かつ讀えつつ深き回願をなし心豊かにのびのびとした境地に大いなる感激にうたれた。

寺の案内にて御兩親尊廟、二幡の椋、片目川、産湯の井戸、月影の池など見学し、宝物館にては上人誕生絵画、蓮生坊像、三尊刺しゆ仏など拝観した。然し太閤釜とか八百屋お七の振袖などは寺にふさわしくない俗物と感じたが、お七が純情に生き封建性に反抗し、權威に屈せず当時の民衆の代表として自由を求めたお七の心境に深く心打たれるものがあり、お七の戒名「花月妙艶信女」を回向して寺をさった。

私は長い間の勤務を終り定年退職し住職として現在ありますが、第二の人生として仏の大慈大悲にすがり毎日多忙な追いつめられたような、その日ぐらして、老師なき跡の寺院経営は苦の連続であり、老を迎かえつつある妻と一生懸命にすごしている。三十余年の楽しい教員生活にひきかえ現実はおえろとほっとした心境である。然しながら年末の希望である素朴な聖地誕生寺をおとずれて、しみじみと思うのは加行の時に黒染の衣をまとい質素な真摯な修行のことを今更に思いうかべる。誕生寺の素朴なよごれない清楚な地に、黒染の衣とねずみ色のおけさのおすがたで、勉強に修行にいいしんだ法然上人を想像して、すがすがしい、なつかしい気持がそれからそれとわいてきた。文豪藤村が野趣ある素朴な山

中の馬込妻込の地に生を得たからこそ文学的教養に文学的素地がつくられたのと同じ思いがする。私は今、同じ思いにふけり現実の虚脱した実のない華美な世相に思いをよせるのである。このことにつけても金田明進氏の「すみぞめの心」の記述に深く同感し敬意を表すと共に我が意を得た感が大きい。金田氏は、「お互の心おこりて、名譽を求めたり、地位をのぞんだりするもの、その服装に原因があるかと思われる烏帽子もきざる法然さまをしっかりと私どもの心の中に受けとめねばなりません。法然さまがお教え下さった愚鈍念仏もここから出発せねば本當に受けとれません」と述べておられる。みなすみぞめの祖師の心にかえって、自然のあるがままの真実の中においてひたすらに念仏することが唯一の道であると私も深く感じた。

要するに豪華絢爛の高樓や、近代の様式と設備を誇る楼閣や、形式的組織的中央集権制度や、学者という人の具象性のない空論や、名刺榮達利欲のみを追求する売名の俗物や等々よりも純朴な自然にめぐまれた田園にかえり、又その気持ちにて黒染にねずみ色の衣をまとい真摯に求道にいそしんだ真実自然の法然の心にかえるこそ念仏行者の進むべき道ではあるまいかと思う。



一億総中流化を考える

最近、興味ある調査結果を目にした。総理府統計局が実施した「国民生活に関する意識」という調査である。この中で、自分の生活水準は、上・中・下のうちどれに属するかという項目がある。この答えの、実に九割までの人が「中くらい」と回答しているが、これは何を物語るのだろうか。日本には上流と下流階級の人が少なく、圧倒的に中流階級が多いが、中流のなかを、更に「上・中・下」とでも分けなければならぬこの「マンモス階級」は、はたして豊かな生活をしているのであろうか。これは単に自分の問題だけでなく日本人全体を考えることにもなると思う。

このようにみると、日本には「中くらい人間」と自称する人々がうようよしていることになる。これは、本来の意味からの中流階級であるならば、こんなに結構なことではない。本来にみんが、苦しいまずしい生活からほど遠い中流の生活をしているならば、平和であるといえるからである。しかし、私たちは本当に「中流」の生活をしているのであろうか。

それは一部の本来の中流階級を除いて、見せかけの中流意識の中に生活を余儀なくされているのではないだろうか。

日本の中流階級の代表バッターは、何といっても団地族と呼ばれる人たちである。あるいはアパートの高級化をもくろみ、種々な呼び名をしている大衆化されたマンション族と呼ばれる人たちがいる。これらの家庭では、カラーテレビ・クーラー・カーの三Cがステータスシンボルとしてあり、隣りで買えば我家ともいう気持が強くはたらくのである。例えば寝る布団と物干しにつるす布団が別であったり、カラーテレビ用のアンテナが、カラーテレビより多く売れている事実を、ただ一笑できるであらうか。こういう虚栄化の中に根ざしているものは、自分も中流階級の中の一人であるという「参加意識」程度のものにほかならないのではないだろうか。

アメリカでは、ピカピカのキャラデラックに乗っている黒人が以外に多いという。これは黒人の劣等感が収入に不相応な車を月賦で購入させ、自らの生活を圧迫しているのであ

る。ひるがえって日本人の中流意識をみるならば、黒人のキヤデラックではないが、こうしたひずみがないといえるであらうか。

この頭の中だけでの生活の向上を考える時、その奥に根ざす根本的な原因をつきとめ、是正しない限り、この矛盾した生活様式はますます己れの生活を苦しめていくことになる。

それがよいというのではないが、昔は職人は職人らしく、商人は商人らしい生活の態度があった。身分・階級が明示され、その域をでるようなふるまいはあまりなかったという。そこには少なくともひずみある生活はなかったのである。

今日では、そうした職業的差異や大都市と小都市、都会と農村というような地域格差がなくなり、いわゆる同質化されていく現象がみられる。これは大変喜ばしいことではあるが、そこには黒人のキヤデラックに類似するムリがあることも見のがせないのである。

さて、さていろいろ述べてきたが、今私たちが考え、かつ必要なことは、このムリをなくすために、何をどのように正しく自分のものとしていくかという大命題の答えを出すことにある。そのためには、自分の収入を再検討し、しっかりと自分がどのような地位、立場におかれているかを把握するこ

とが、なにより大切であらう。外見のみ着飾ざり、それが中流であると自認したところで、何が得られようか。

中流の生活とは、自分の持ち家があり、生活に必要なものすべてがそろい、ゆったりとした生活が送れるということである。この概念からみれば、たえず物価高に追われ、住宅難に苦しめられている自称中流族は、そうした中流への志向性を反省すべきであらう。

何びとといえども、豊かな生活を望まないものはないであらう。その願望が、己れの生活にマッチしつづつ満たされていくのであれば、そこには何ら矛盾は生じない。しかし、ひとは絶えず他人との比較の中に、自分をみてしまうのである。その結果、力以上の見栄のために、一時の満足のために、それまで築きあげてきた生活を崩し、そのあとに來るであらう困難にみちた生活を忘れさるのである。

今日のこの複雑化した社会環境をみると、より綿密な生活設計を立てて、初めて並な生活が成し得るといわれている。苦しい苦しいといいながら、生活意識だけは中流であると思ってしまうところに、なにか自分で自分をだましてしまっているようなところが、私たちにはあるといえよう。この日本人中流志向に、反省の目を向けるべきであらう。

道

四天王寺への道

高橋良和

大阪の一心寺のことは、前に記したから知ってもらっていると思うが、その一心寺の向い側に天王寺がある。

その四天王寺は法然上人の二十五霊場のなかの第六番の札所である。

ところでこの四天王寺であるが、昔といっても戦前には天台宗であったが、戦後独立して和宗が創建され、その総本山になっている。

四天王寺というと、大阪の庶民の寺であって、聖徳太子の御開創の寺であることはいまでもない。

ところがこの寺の境内にある念仏堂が、法然上人の霊場の第六番目の札所なのであるが、残念なことに戦災ですっかり焼けた四天王寺には、この念仏堂が復興されないままになっているので、二十五霊場目あての参詣者にとっては、何の目

あてもないのである。

それでは非二十五霊場の表柱ぐらいいは、こここの念仏堂のあとに建ててもらはないと、法然上人の御遺跡としての威厳に欠けると思うのである。

この念仏堂は、久安年間の創建であるが、その施主は鳥羽法皇であったとつたえられている。

念仏堂は、その昔聖徳太子が念仏された道場であるといわれるが、果たして聖徳太子が念仏されたかどうかは知る由もない。

法然上人は、この四天王寺に参詣の折にここで念仏したというのが霊跡となったのであって、このところで高野の明遍僧都と問答をしている。四十八巻伝の第十六に、

上人と明遍との問答と題して

上人天王寺におはしけると、僧都善光寺参詣のことありけるが、たずね参ぜられて、まづ使いに案内し給うに、上人客殿に出まふけてこれへと仰せられる。

と書き出して、明遍僧都との間に出離の道についての問答がつたえられている。

この明遍僧都はなかなかの学者であつて、高野山に隠遁したのであるが、あるとき、法然上人の選択集を読んだとき、この選択集は多少かたよつた念仏についての書物であると思つて、その夜床に入つたときに、この四天王寺の西門（さいもん）において、貧しきもの、病めるものが多勢うごめいてるとき、ある立派な僧がこの場所にて、鉄鉢に粥を入れて持ちきたり、その不幸な人々の口に、一人一人粥をほどこしてゐるのである。

もちろん夢のなかである。そこで明遍僧都はかたわらの人に、「あの人は誰であるか」とたずねたところ、「これは法然上人」であると言はれて、はつと目がさめたというのである。そこでこの明遍僧都が、ふと吾にかえつてその夢の判断をすると、自分は法然上人の選択集をかたよつた文書であると批判したので、法然上人からいましめられたゆめであらうと考えて、念仏の門に入つたことである。

夢であるから、法然上人が実際に貧しき人々に直接施粥し

たわけでもないが、法然上人の大衆救済の姿があらわれているといえるのである。

この四天王寺の念仏堂の詠草に、「阿弥陀仏と心は西にうつせみのもぬけはてたる声ぞ涼しき」というのがある。

法然上人の霊跡としては、そんな縁故が深いところでもないが、然し、明遍僧都を通して法然上人の人柄が偲ばれる念仏堂であるといえる。

最近大阪の地下鉄がこの四天王寺の前を通つたのであるが、その駅名が夕陽ヶ丘と四天王寺の二つがつけられている。大阪の庶民の寺として四天王寺の存在は大きいので、この駅名をつけたと思われるが、駅から四天王寺までは一寸距離がある。

金堂、五重塔など、伽藍は復興しているが念仏堂だけはまだである。

我々浄土宗のものがなんとかして、この念仏堂を復興したいものである。

四天王寺の西門は、そのまま極楽の東門と向いあつてゐるといわれる。

それなら極楽はまっすぐである。

それであつてこそ、法然上人のこの地での念仏の修行の意味は大であるといえる。

『述聞副文』

(前略)

上梵王帝釈 下閻魔太山^(イマ)

日本諸神 山王七社等

惣者釈迦大師 弥陀善逝 観音

勢至一切聖衆等御罰 於良曉之

現当可罷蒙之状、如件。敬白

正中二年^{乙丑}三月十五日

釈寂恵(花押)

(奥書)

法述聞副文者先師為除

遣弟疑慮、被書置之處也。

然則企誓文之趣可守

相伝之正義者也。仍以先師

加判之本、所授壁滿^{良順也}。

康安元年八月三十日

桑門良譽^{六十六歳}
(花押)

浄土宗列祖の墨蹟をたづねて

これは鎌倉光明寺に現存する寂恵良曉の『述聞副文』の末尾と良譽の奥書である。『述聞副文』は鎌倉光明寺開山良忠の子良曉が、自己の第二代目としての正統性を主張するために、師匠良忠との關係を詳細に記したものである。本文は巻物であり、かなり長文のものであるが、ここに写真で紹介した部分は本文の末尾の起請文である。良曉はもし本文の内容に偽りがあつたならば、日本大小神祇や諸仏の罰をうけてもやむをえないといっている。

奥書を見ると良忠の死後、良曉・良辨・良空等弟子達の間で後継者争いが起つた。この中で弟子達の疑いをはらすために書かれたのがこの書であると良譽は記している。良譽は良曉の後、鎌倉光明寺三世となる僧である。良譽は更にこれを聖満良順に授けている。鎌倉光明寺は開山良忠以来、良曉・良譽・良順と相伝されており、この述聞副文の奥書が附法狀の替りになっていることがわかる。鎌倉時代後期の浄土宗の伝法的一端がうかがわれる興味ある資料である。

(宇高 良哲)

高麗王帝釋 下洞庵太山
 日本諸神 山王七社等
 應者釋迦大行 誦陀善願 觀音
 結至一切聖衆等 御釋石良曉
 現留可所蒙之狀 伏件 敬白

二年三月十五日
 石良曉

光明寺二世良曉真蹟

同三世良譽真蹟

此述同副文者文師為除
 隨牙凱處被書蓋之度也
 強則恒哲文之趣十字
 拾傳之可藏者也仍以文師
 加刊之可取授聖由
 康安元年八月廿日
 東門良譽

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
 (送料十二円)

会費一力年金一、二〇〇円
 (送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二日
 第三種郵便物認可

昭和四十七年一月二十五日印刷
 昭和四十七年二月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦
 発行人 佐藤 密雄
 印刷人 関 二三男
 印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
 振替東京八二一八七番

大 正 大 学

東京都豊島区西巣鴨3-20-1 TEL(03)918-7311(代)

昭和47年度学生募集

募集人員 200名・2,3年若干名 大学院修40名・博13名
カウンセリング研究所研究生10名
出願期日 第一次 1月10日(月)~2月22日(火)
第二次 3月1日(水)~3月22日(水)
試験日 第一次 2月24・25日 第二次 3月24・25日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学
文学部 文学科—国文学・米英文学
史学科—日本史学
哲学科—西洋哲学・中国学・宗教学
社会学科—社会学・社会事業
大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学
カウンセリング 研究生

◎詳細は同学総務部入学案内係へ (〒共 150円)

"春彼岸会の施本に好適"

本会 発行 『ひがん会』 春 期 号

新書判・表紙共12頁・価15円 200部以上13円(送料実費)

御用のむきは早目に本会へお申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

TEL (03) 262-5944
振替 東京 82187